

下田歌子の宮中出仕と歌子 名下賜前後の考察

小林 修

はじめに

大正九年四月十一日、下田歌子は明治聖徳記念学会に於いて「昭憲皇太后陛下の御坤徳」と題する講演をなしたが、この記録は同年十月印刷に付され同学会から刊行された。若くして昭憲皇太后の身近に仕え、歌の御相手を勤めた女官時代の回想を謹述しただけに、きわめて興味深いものがある。例えば公にされていない昭憲皇太后の和歌「こゝにわかじめしむしろはせまくともひろくたつねんふみのはやしを」や「ひとことのしけさきくにはまさりけりのきはにかきせみのもろこえ」などにまつわる挿話は、歌意だけでは窺うことの出来ない昭憲皇太后の面影を歴々と伝えて貴重な証言となっている。「昭憲皇太后と下田歌子」の関係を考察するには、右の記録に勝るものは無いと思われる。本稿はさらに焦点を絞り、若き日に昭憲皇太后

の恩寵を蒙り、「歌子」の名を賜った宮中出仕前後の下田歌子について考察するものである。

1

平尾鉦せき（後の下田歌子）は、安政元年（一八五四）美濃国岩村（岐阜県恵那市岩村）に岩村藩士の父平尾録蔵と母房子の長女として生まれた。祖父は東條琴臺である。曾祖父平尾録蔵（号宅山）は藩主松平能登守（当時幕府老中）の側用人として江戸詰めの頃、大田錦城に師事したが、嫡男を失ったため、娘貞に婚養子を迎える必要に迫られた。そこで錦城に門下の有望な者の斡旋を依頼した。かくして師錦城の愛弟子たる東條琴臺が平尾家に入ったのである。そして琴臺と貞の間に生まれたのが、鉦の父録蔵であるが、この婚姻は平尾家にとって不幸な結末を迎えることとなる。岩村藩主松平乗蘊の第三子は林大学頭述斎である。林家七

世大学頭錦峯が没して嗣なく、幕府に請われて林家八世を襲った。述斎は永く学政を督学し、昌平坂学問所を確立し官学の權威を復興した。また幕府儒官佐藤一斎も岩村藩老臣であり、述斎とは縁戚關係を結んだ。したがって、藩主松平家・林家・佐藤家は強い絆で結ばれ、藩学の主流は当然のことながら朱子学であった。一方、琴臺の師大田錦城は所謂折衷学派の泰斗である。この二学派の対立が深刻なものとなるに及び、岩村藩に於ける琴臺は異端と指弾され苦衷の中に平尾家を去らざるを得なかったのである。平尾它山もまた琴臺の将来を思いやり、これを認めたという。時に文久二年琴臺二五歳、前年に生まれた一子福太郎（録蔵）を残しての離別であった。旧姓に復した琴臺は、その後越後高田藩榊原氏の儒臣となるも、嘉永三年に著した「伊豆七島図考」が幕府の忌諱に触れ、藩邸に幽せられた。以後高田に移され住すること十八年、私塾を開き藩士に教授した。また藩学修道館落成に伴い教授職に補せられた。一子録蔵は成長し岩村藩勤皇派として活動、度々譴責を受け幽閉にも及んだ。この間、藩主も替わり、録蔵の代になると、琴臺と平尾家との間の音信も、黙認されるようになった。慶応年間に録蔵は藩許を得て越後に琴臺を訪ね、初めて父子面会を果たしたという。録蔵四十歳、未だ幼少の銚にとつても忘れがたい記憶となった。明治元年に至り

岩村藩は家老丹羽瀨市左衛門により漸く藩論を勤王に統一させた。明治維新後、琴臺はいち早く鎮将府の命を受けて上京、昌平黌において儒学を講じた。明治元年七月、琴臺七十四歳である。褒賞慰勞され高田に帰ったが、明治三年再び徴されて神祇官宣教少博士に任じられた。他方、平尾録蔵も同年秋、宣教使吏生に任じられ単身上京している。再び生きて父子の対面が叶ったばかりでなく、明治維新を経て、平尾家に漸く明るい光が差し込み始めたのである。

翌明治四年、十八歳になる銚が上京したのは四月のことである。そして明治五年十月に宮中出仕を果たすことになったのだが、本稿では、平尾銚の上京前後と宮中出仕そして昭憲皇太后よりの「歌子」名下賜に関して、実践女学校『香雪叢書』⁽¹⁾・西尾豊作『下田歌子傳』⁽²⁾・実践女学校『下田歌子先生傳』等に触れられることの無かった資料を通して考察してみたい。

2

明治二十五年七月、雑誌『志からみ草紙』（森鷗外主宰）第三四号に加藤雄吉が「歌話五則」という随筆を載せている。その冒頭「おのが家に蔵せる八田翁の自筆のうち左の歌あり。」と述べ、「せき子の宮つかえしけるをよるこひて」と詞書きのある歌二首を紹介している。そして「この

せき子とは今の下田歌子ぬしなりというものあり、いかにや。」と問いかけている。八田翁とは桂園派歌人八田知紀であるが、その二首は次のようなものである。

ことの葉のまことを道のしるべにて

位の山はのほり初めけん

九重のおほうち山にさきてこそ

こと葉の花の実は結ぶらめ

前述のごとく、下田歌子のもと平尾鉦と言ひ、八田知紀に歌を学んだことも既に明らかな事実であり、これが下田歌子（当時平尾鉦）の宮中出仕を祝つて師から贈られた歌であることは明白である。翌月の『志からみ草紙』（第三

五号）にも萩園主人（落合直文）が「加藤ぬしの歌話」でこれに応え「故八田翁の歌のことばがきに、せき子の宮づかへしけるをよるこびて、とある此せき子は、今の下田歌子ぬしなりというものあり、いかにや、とあるは、げにも下田のことなるべし、歌子はもとみの国岩村の人、平尾氏の女にて、はじめの名せき子といへり、幼きより歌をよくよみて、人にしられたる才女なり。」と述べている。ちなみに、加藤雄吉は郷里に埋もれた人物だが、明治六年生まれの鹿児島の人。年少の時上京し桂園派の松浦辰男に師事した。同門に若き日の松岡（柳田）国男・田山花袋などがある。加藤と鷗外については別稿に触れたことがあり、繰

り返さないが、八田知紀も旧薩摩藩士であることを想起すれば、加藤の家に八田の書があったことは不思議ではない。とすれば、これは著名な歌人の歌に下田歌子（平尾鉦）の名が現れた最初のもので言うことが出来よう。平尾鉦は明治五年十月二十三日宮中に出仕、宮内省十五等出仕に補せられており、右二首はその前後の作と見られるが、知紀は翌明治六年九月二日六十五歳で没していることを考えれば、最晩年の歌でもある。鉦の歌才を高く評価し、大内山（宮中）でさらに大きな花を咲かせ実を結ばせることを予祝した老師の真情溢れる二首である。

ところで、鉦が八田知紀に師事したのは、岩村時代からとも上京後とも言われている。『下田歌子先生傳』には、八田の「君もわれも都とともに移りきてあそぶもふかき契ならずや 知紀」とある短冊写真が小さく掲載されている。現在実践女子学園の「下田歌子関係資料総目録」には此の短冊の存在は確認できないが、上京直後の平尾鉦に贈られたものである。そして歌意から見れば鉦の入門は上京後と考えられるが、それ以前にも書信による添削応答があったとも解される。既に触れたように、祖父東條琴臺と父平尾録蔵が宣教使少博士と吏生に任じられたのは明治三年であったが、八田知紀も同年宣教使少博士に任じられている。とすれば、祖父・父を通じて岩村に在る鉦の入門が取り計

らわれた可能性も充分考えられる。知紀門下の高足高崎正風⁽⁵⁾によれば、鹿兒島時代・京都時代を通じて、知紀には各地の弟子筋から添削を乞う歌稿が多数送られていたという。そして銚が上京した明治四年には、知紀は宣教使中博士に補せられ、翌五年四月宮内省に転じ、八等出仕歌道御用掛を命じられている。かくして十月に至り、八田知紀・高崎正風等の推挽により平尾銚の宮中出仕（宮内省十五等出仕御書物掛）が果たされるのだが、同時に知紀は七等出仕に補せられている。先の「せき子の宮つかえしけるをよるこひて」と詞書きのある二首はこうした中で詠まれたものである。

さて、ここでさらに一首、平尾銚の宮中出仕を祝った歌を紹介しておきたい。

平尾せき子の君の大宮つかえにまゐらせる折に
ゆく末を雲井はるかにあふきても

なほ目の前にちるなみた哉

これは樋口一葉の師として著名な中島歌子の歌である。没後に門下により編まれた『萩のしづく』⁽⁶⁾に収録されている。中島は天保十二年（一八四一）生まれ。一説に弘化元年生まれとも伝えられるが、銚よりもひと回りほど年長ということになる。加藤千浪門下の桂園派歌人。歌塾萩の舎を開くのは明治十年頃であり、歌子と改名したのもこの年

である。したがって、右の歌を詠んだ時には前名の中島とせであったと思われる。ちなみに樋口一葉が入塾したのは明治十九年、十五歳の時である。当初歌子とのみ聞き、下田歌子と間違えて入門を依頼した逸話は一葉日記の伝えるところである。中島は同門の伊東祐命が御歌所に入ったところから高崎正風など御歌所派の知遇を得たとされるが、右の時点では八田知紀が存命であり、同じ桂園の流れを汲む者として、知紀の知遇を得、知紀を通じて平尾銚と交流が生じたものと思われる。後世から見れば、歌子より歌子に贈られた歌ということになり興味深い。この時点では未だ二人とも歌子を名乗ってはいない。中島とせから平尾銚に贈られた歌ということになるが、この時点の二人の結び付きは意外であり、いっそう興味深いと言えよう。

3

明治五年十月二十三日宮内省十五等出仕に補せられ、宮中出仕を果たした平尾銚は、間もなく昭憲皇太后から歌の才を愛でられ歌子の名を下賜されることになるのだが、そのことは何によって世に知られ、またどの時点の何の歌によって歌子の名を賜ったのか。こうしたことは現在に至るも未だ必ずしも明確ではない。例えば、明治十二年の篠田仙果編『明治英銘百詠撰』⁽⁸⁾には、「平尾歌子」について次



図1 篠田仙果編・生田芳春画
『明治英銘百詠撰』(明治12年11月、文泉堂)



図2 安井乙熊編・松斎吟光画
『明治英明百人首』(明治14年4月、錦松堂)

のような紹介文とともに、和歌一首と絵姿が紹介されている。

君は旧岩村藩士平尾録蔵氏の女なり初の名を於銘と云天質英邁にして和歌を好み年十三の折千草の染替五巻をあらはす学和漢を兼明治五年宮内省十五等出仕に補せられ御書物掛りを命じられ幾程もなく権命婦を拜命す画上の詠は歌と名を賜りしときよめるなり。

ほともなき袖にはいかがつつむべき

大内山につめる若菜を

平尾歌子

右の歌が歌子名を下賜される対象となったものと解する向きもあるが、「若菜」と「我が名」を掛けているところから見て、これは「歌子」という名を賜った折の、その榮譽に対する答礼の歌というべきものであろう。

明治十年代にはこのような書物が多く版行されたが、もう一つ明治十四年の安井乙熊編『明治英明百人首』にも「権命婦平尾歌子」として次のように紹介されている。

君は初め名を阿銘と云ふ旧岩村藩士平尾録蔵氏の女なり其の性伶俐穎敏にして和漢の学に達し殊に和歌を善くす年十三のとき千艸の染替五巻を著はす其の学才想ふ可きなり明治五年宮内省十五等出仕御書物掛を命

ぜられ幾く程もなく権命婦を拜命す曾て名を歌と賜ひし時の詠に 程もなき袖にはいかがつつむべき大山内につめる若菜を

権命婦平尾歌子

つれつれと雨にこもりて我山の

さくらみる日は珍らしきかな

記事内容は両者ともほぼ同様であり、歌子名を下賜された時の歌も「大内山」が後者は「大山内」になっている他は同一である。その他、明治十一年作と見られる「雨中花」の一首が紹介されているのが目新しい。ちなみに右の「雨中歌」は佐々木弘綱撰『千代田歌集』⁽¹⁰⁾第一（明治二三年）の春の部にも収録されており、十年以上経ても世の人に読まれていたことになる。明治十年以降は、こうした通俗的書物によって下田（平尾）歌子の名は広く世に知られるようになって行ったものと思われる。『下田歌子先生傳』などによれば、歌子の名を賜つたのは、宮中出仕から二ヶ月ほど後の明治五年十二月のことという。当時地方の士族の娘が宮中に出仕すること自体が異例であったばかりでなく、歌才を愛でられ名前まで賜つたことは、異例中の異例と言わなくてはなるまい。そうとすれば、もう少し早く此の事を広く世に知らしめたものがあつたはずだと考えられるが、それは何であつたのか。一つは新聞という新しいメディア

であつた。次に紹介する明治六年の『郵便報知新聞』⁽¹¹⁾に次のような記事が見られる。

平尾氏銘と云ひ後改め歌なる者は、元岩邑藩平尾録蔵の女にして元高田藩東條琴臺の孫なり。岩邑に生まる。四五歳の時より伶俐にして常に三十一言を口占し十歳の頃に及んで一日に一百首の探題を咏すること容易なり。去りし明治三年庚午の年東京へ出て専ら和歌漢学を研窮せり。去年壬申の十月宮内省へ出仕を命ぜられ、初めて参朝の日歌を奉れとあり、又種々の賜ありけるに

敷島の道をそれともわかぬ身に危くわたる雲のか
け橋

うれしさを包む袂にこぼるるは恵のつゆのあまり
なるらん

其後不日に名を歌と賜ひければ

身につみて思ふもやさし蔭広き大内山に得てしわ
かなを

いかにせん其難波津にさく花を名のみなからのは
したなき身を

或人云、右女五六歳の時水戸の勇士櫻田の事あり。弔歌数首を咏せしよし。其後三四年を歴て景山老公に贈官あり。其他櫻田等忠死の者を憐恤あられし時に無題

二十首の詠歌ありしが前月祝融の為に其稿はもとより十数年来の詠草若干の冊子も悉く烏有に属す。

然るに右に云ふ無題二十首の中纔に五首の記憶せるものあり。十歳未滿の幼女にして憂国の志を見るに足れり。今斯に録して大方の高覧に供す。

立迷ふ昨日の雲は空に消て今朝あらはるる筑波根の峯

武夫の花と散りにし櫻田は吹く神風のはしめなるらん

皇国のいしすゑとしも柱ともなるへきものは大和魂

善しといひあしと聞きつつ津の国の難波につけて世を想ふかな

君か世の猶永かれと繰りかへし祈るはかりぞ賤のをたまき

(明治六年九月十三日『郵便報知新聞』)

『郵便報知新聞』の創刊は明治五年六月、当初月六回の発行であつたが、日刊となつたのは明治六年、つまり右記事が掲載された六月一日からである。この記事によれば、十月二十三日の最初の参内の日に詠んだ歌(二首)を契機として、「不日に」つまり、あまり日を経ずに「歌子」の名を賜つたことになる。さらに、その榮譽に応えた

答札の歌二首も記されているが、「身につみて思ふもやさし蔭広き大内山に得てしわかかなを」の歌は、先の『明治英銘百詠撰』等の「ほともなき袖にはいかがつつむべき大内山につめる若菜を」の歌とも異なつたものである。後の『香雪叢書』では「身につみて……」の歌はさらに変化したものとなっている。

4

『香雪叢書』第二巻に収められた宮中出仕時代の和歌は五三九首あり、明治五年から十二年までのものが、新年・春・夏・秋・冬・雑の部立て配列されており、一首ごとの作歌年代は詳らかではない。しかも下田歌子自ら精選したもので、『香雪叢書』収録の和歌総数は一〇〇〇余首であるが、これは全体の一割にも満たないという。したがって、晩年の歌子によつて割愛された歌は無数にあり、先の「程もなき……」の歌も『香雪叢書』には採録されていない。同書には「歌子といふ名を賜はりけるをりに」として「身につめておき所なくおもふかな大内山にたまはりしなを」が採録されているのみである。それ故、『香雪叢書』においても、歌子名下賜の対象となつた歌は確定することが出来ない。この事に就いて西尾豊作『下田歌子傳』(昭和十一年)には次のように断定されている。

ある時、春月なる勅題を拝して、

手枕は花のふ、きにうつもれて

うた、ねさむし春の夜の月

女史のこの詠には昭憲皇太后悉く感じ給ふて、名を歌子と賜つた。

確かにこの「春月」の歌は歌子の作として広く世に知られたもので、国木田独歩「巡査」(明治三五年)には「春月」の漢詩バージョンまで披露される場面がある。西園寺公望の護衛巡査をモデルとした好人物の巡査が、独歩らしき「自分」と一献傾けながら自作の漢詩を「どれもまずいなア」と言いながら「朦朧烟月の下、一酔花に對して眠る、風冷やかに夢驚き覚れば、飛紅枕辺を埋む」と吟じ、これは下田歌子さんの何とかいう歌を翻訳したものだと思えてゐる。早ければ明治六年、遅くとも明治十二年迄には詠まれたと見られる「春月」の歌が、明治三十年代の中頃に至っても世に行われていた証左である。歌子名下賜の契機となつた歌であればなおさらであろう。

『下田歌子先生傳』(昭和十八年)にも「巷間伝へてこの詠によつて深く昭憲皇太后の御感に入り、歌子の御名を賜はつたといふのも、強ち訛傳と称すべし謂れはあるまい。」と述べ、西尾説を踏襲している。しかし、これに加えて、この一首だけでかかる光榮に浴したのではなく、「昭憲皇

太后の御歌の御相手を仰付けられ、また宮中の女官達より唱歌の手解きをも乞はるるほどにその歌名の高きを致し」たことと、忠実聡明な性格と優雅で節度ある挙措が「いたく高貴の思召しに叶つた」ためであろうと推測している。だが、皇后の歌の御相手を命じられたのは宮中出仕後しばらく時を経たのちであると考えられる上に、「春月」の歌が歌題から見て明治六年以降であることを考え合わせると、如上の説はなお疑問の余地があると言わなければならぬ。

先の『郵便報知新聞』の記事から判断すれば、参内後「不日に名を歌と賜」つたと見られる。とすれば、それは明治五年でなければならず、「春月」以外の歌に依つてであると見做すのが妥当であろう。この『郵便報知新聞』の記事を信ずれば、その歌は「敷島の道をそれともわかぬ身に危くわたる雲のかけ橋」と「うれしさを包む袂にこぼるるは恵のつゆのあまりなるらん」の二首ということになる。これを裏付ける根拠として、筆者が偶然入手した『下田歌子著作集 香雪叢書』全六巻の「内容見本」⁽¹³⁾がある。これは、同叢書の予約募集のため昭和七年に作成されたもので、「喜寿の年に当りて、知友及門弟子に申告す」と題する下田歌子の一文を冒頭に、刊行趣旨および各巻の内容解題と組見本を紹介したもので、その第一巻「歌集雪の下草」の解題に次のような箇所がある。

京都新聞 第56号

京都新聞第五十六號 明治六年一月

一月十日美濃關ヶ原驛東洋定計ヨリノ來書ニ云ク濃州不破郡垂井間ヶ原近郷ハ素ヨリ山際ニテ人民頑愚ノ地ナリ悞故アリテ近年此驛間ニ來住ス時ニ世上追々小学

二月者 新聞

(二)

モ之ヲ用ユル人々ハ左ノ方法ヲ以テ試驗セバ其愛ヲ免ガル、由水吞ガラス或ハ飯茶椀ニ寒瓊計百二十度ノ温湯ヲ一杯入レ其上ニ石炭油小量ヲ加ヘ久シク搖ホリ早附木ヲ以テ火ヲ付ケ見ルベシ其時燃揚ラザレバ危キナキ故良好ノ質トス左モナクテ燃揚ル令ハ暴發質ノ油ニテ甚ダ危ケレバ決シテ買入ル、ベカラズ

○濃州旧岩村藩今岐阜縣實屬士族平尾其近世東京ニ寄留ス其ノ女名ハ勢幾去年十八歳幼ヨリ國歌ヲ志シ同藩

力九某ニ學ビ追々熟達ノ所洗服來朝ノ琉球正使宜野灣朝保ナル人亦國歌ヲ善ヌ滯在中鹿兒島邸ニテ歌會ヲ催シ雅流群集マルニ勢幾並ニ婦女輩段々出席ス正使勢幾ノ詠歌ヲ歎賞シテ琉球袖一疋ヲ贈リ其他潤秀九名ハ琉球本編各一段ヲ興フ其後十月廿三日宮内省ヨリ御用召ニヨツテ出頭シ十五等出任被 仰付候所服飾ノ粗ナルヲ以テ辭ス凡苦シカラザル旨被 仰出廿九日初テ拜命シ小袖ニ 黑縮緬ヒロシロ 白縮緬シロシロ 緋縮緬ヒベシロ 緋縮緬ヒベシロ 帶オビ 袴ハカマ 等ヲ拜領ス又 皇后御方

二月者 新聞

(三)

へ拜禮被 仰付物品ヲ下賜セラレ宮内卿徳大寺公ニ拜謁シ即日御題ヲ賜ハリ歌ヲ詠シ 天覽ニ供スルニ御賞詞ノ上 御菓子等ヲ下賜セラレ官女局ヨリモ下贈ノ物少カラズ原來宮中女官ハ華族並ニ舊官人ノ女ノミ勤仕スルニ勢幾十五等出任拜命スルハ全ク歌歌ノ一徳ナリ方今文化日新ノ秋婦女子ト雖モ文学ニ勉厲セバ閨閣ノ模範トナラント京師留寓ノ舊岩村士族某ヨリ傳聞ノ保投書ス一月十一日

図4 『京都新聞』第56号(明治6年1月)

留寓の旧岩村藩士よりの伝聞を投稿したとあり、末尾に投稿日と見られる「一月十一日」という日付が付されている。平尾鉦宮中出仕から数えて三箇月足らずの記事であり、しかも京都の新聞であったところが興味深い。管見の及ぶところ、下田歌子（平尾鉦）の名が新聞に現われた最初のものと思われる。しかも、これまでの下田歌子伝では触れていない新事実が報じられている。まず岩村では和歌を同藩の力丸某に学んだとある。従来の歌子伝では大野鏡光尼に師事したとされている。それでは力丸某は単なる訛伝であろうか。旧岩村藩士に力丸吉次郎（元長）という人物がいる。実践女子大学図書館所蔵の下田資料中に、力丸元長宛の父平尾録蔵書簡や力丸元長の和歌短冊がある。さらには「力丸家親類書」（天保十四年）も保存されているところから見て、力丸家とは縁戚関係があったものと考えられるが、実は父録蔵の祖父鍛蔵（它山）は力丸家から入婚した人物であった。とすれば、歌子は幼少より、漢籍・漢詩を父に学び、和歌を力丸元長に師事したことも充分に考えられるのである。さらに興味深いのは、琉球使節宜野湾朝保による鹿児島藩邸における歌会の記事である。この歌会において平尾鉦の歌が高い評価を受け褒賞されたことが明らかになった。おそらく鉦にとってはこうした格式ある歌会へは初めての参加であろう。この琉球使節は正式には維

新慶賀使⁽¹⁶⁾と言い、正使伊江王子朝直・副使宜野湾朝保一行が明治五年七月二十五日琉球を出発、九月三日に東京に着している。そして十四日明治天皇に初めて拝謁、琉球藩が設置され、尚泰王が藩主として華族に列せられ東京藩邸も与えられたが、使節は関係の深い薩摩藩邸などに滞在したものである。とすれば、この歌会には当然のことながら、薩摩藩士八田知紀も列席していたものと考えられる。鉦の出席は師知紀による従慥の可能性が高い。そればかりでなく、宜野湾朝保も古くから八田知紀に師事した歌人でもあった。宜野湾朝保は明治九年五十四歳で没したが、没後『松風集』⁽¹⁷⁾が編まれた。同書に付された略伝によれば、安政五年に公務により薩摩に赴き八田知紀と交わり師事したという。また、慶賀使として上京の節「吹上離宮ノ御歌会に陪シ御兼題当座ヲ詠進シ 叡感ヲ蒙ル」とある。この吹上離宮での御歌会の点者が、既に四月から歌道御用掛を命じられていた八田知紀であったことを想起すれば、前後して開催された鹿児島藩邸での歌会も八田が点者を勤めたものと思われる。『京都新聞』の記事はこの歌会の後、平尾鉦の宮中出仕の事に続くのだが、これを推挙したのも八田知紀であったことは既に述べたごとくである。『京都新聞』の記事には八田知紀の名は現れないが、こうした一連の動きを見ると、平尾鉦の宮中出仕には師知紀の周到な配

慮が働いていたことが窺われる。

再び記事に戻れば、参内の日に歌を詠み、天覧に供せられた上に御賞詞を賜り、数々の品を下賜されたことが報じられているが、「歌子」の名を下賜されたことには触れられていない。この時点では京都までそのことが伝わっていなかったと見るべきであろうが、詳細は不明と言う他はない。ところで、この記事中には五字分の黒く抹消された箇所がある。ここにはどのような文字があったのか？そして何故抹消されたのか？興味深いところである。「歌子の名」とでもあったのではなどと、都合の良い推測をしてみたくもなるが、これは根拠のない憶測に過ぎない。この『京都新聞』の記事の眼目は平尾勢幾（鉦）という華族や公家でもない小藩の武家の娘が、文学の才能ゆえに十八歳で異例の宮中出仕を果たしたことを「文化日新」の世における女性の鑑として称揚するところにあつたと思われる。平尾鉦の「歌子」名下賜の契機となつた歌は、初めて参内した日に詠んだ「敷島の道をそれともわかぬ身に危うくわたる雲のかけはし」ともう一首「うれしさを包む袂にこぼるるは恵のつゆのあまりなるらん」であつたことは、これまでの論述でほぼ確実と言つてよからう。それでは「歌名を下賜されたのは何時のことと見ればよいのか。即日というよりは先の『郵便報知新聞』の記事のごとく「其後不

日にして」と少し間を置いた後と考えた方がよからう。現在のところ、その日付けを確定する根拠を持たないが、実践女子大学図書館所蔵の下田資料に明治五年十二月十日付の父平尾録蔵書簡がある。宛名は「平尾歌子とのへ」（傍点小林）となつてゐる。とすれば、遅くとも十二月十日以前には既に「歌子」名を下賜されたことは確実であるが、それ以上のことは現在のところこれを確定することは出来ない。

いずれにしても、平尾鉦（下田歌子）の宮中出仕と歌子名の下賜という出来事は、新聞という新しいメディアによつて、こうして先ず世に知られることとなつたのである。

注

- (1) 下田歌子著作集として歌子の喜寿を記念して昭和七年より実践女学校出版部より刊行。全六巻。
- (2) 昭和十一年十二月刊。咬菜塾発行。著者西尾豊作には、これより先『東條琴臺』（大正七年二月）がある。
- (3) 実践女学校故下田校長先生伝記編纂所篇。昭和十八年十月刊。非売品。
- (4) 拙稿「東條琴臺・下田歌子と森鷗外」（実践女子大学国文科会『りんどう』二〇二三年七月）
- (5) 高崎正風『歌ものがたり』（遠山稲子篇、明治四十五年五月・東京社）によれば、鹿兒島時代、八田知紀に懇篤に指導を受けるようになり、時には田舎の弟子や琉球の

門人達の詠草を添削することもあったという。後述の宜野灣朝保なども、琉球帰島後はそうした書簡による門人の一人であったものと思われる。

(6) 中島歌子は明治三十六年一月六十三歳を以て没したが、没後明治四十一年三月に門下三宅龍子(花圃)により『萩のしづく』(和歌および随筆集)が刊行された。

(7) 明治二十七年三月の「塵之中日記」末尾に入塾の頃の回想が記されている。それによれば、当初父の知人遠田澄庵から歌子という人を勧められたが、姓も居所も知らず、知人に聞いたところ、それは下田歌子だと言われ、入門の周旋をしてもらったが、「下田ぬしは当時華族女学校の学監として寸暇なく内弟子としては取りがたし学校の方へ参らせ給はば」との返事に断念。しばらくして再び遠田に聞いたところ、それは中島歌子の事だと言われ、漸く萩の舎への入門が叶ったという。

(8) 篠田仙果編・生田芳春画『明治英銘百詠撰』明治十二年十月、文泉堂刊。引用に当り、通行の字体に改めた。

(9) 安井乙熊篇・松斎吟光画『明治英明百人首』明治十四年四月、錦松堂刊。引用に当り、通行の字体に改めた。

(10) 野口竹次郎編として第一編が明治二十三年一月、第二編が同年十二月、第三編が二十六年七月、博文館から発行され、各篇に下田歌子の歌が収録されている。また、これに続く佐々木信綱撰『明治歌集』三冊(明治二十七年、博文館)にも下田歌子の歌が多く採録されている。

(11) 駒通頭前島密が郵便局を通じて集めたニュースなどを載せるため発行させたもので、記事中の「或人云」以下に紹介されている歌子幼少の頃の才媛ぶりも興味深いもの

がある。

(12) 明治三十五年一月「小柴舟」に発表。独歩は前年に竹越三又の紹介で神田駿河台の西園寺公望邸に寄寓したが、「巡查」はこの時懇意になった西園寺家の護衛巡查高野某との交流を描いたものである。

(13) 『下田歌子著作集 香雪叢書』全六巻予約出版のための内容見本。写真、組見本を含め全十八頁。「予約締切：昭和七年九月三十日限」とあり、予約申込所は帝国婦人協会実践女学校出版部である。因みに「内容見本」では、第一巻が「歌集雪の下草」第二巻が「紀行随筆よもぎむぐら」となっているが、実際に出版されたものでは、一巻と二巻の内容が入れ替わっている。

(14) 初め『京都新報』、京都留寓の旧岩村藩士からの伝聞を投書した、とあるが、記事内容は詳細で信憑性も高い。本文に記した「力丸某」に関する記述ばかりでなく、宮中出仕の日付に関しても十月二十三日と明記しているが、実践女子大学「下田資料」に保存されている辞令に「平尾銘」十五等出仕申付候事(壬申十月廿三日) 宮内省」とあり一致する。東京から如何なるルートでこのような情報をもたらされ、かかる記事となったのか、興味深いところである。

(15) 慶応四年三月十九日付の書簡下書きで、平尾家勲皇の儀を岩倉様へお取做しを請うという内容のものである。

(16) 木村礎他編『藩史大事典』第七巻(昭和六三年七月、雄山閣出版)

(17) 編集兼発行者は護得久朝置、印刷兼発行者は加藤安彦。明治二十三年十二月出版。私家版。

(18)

「八田翁の七十賀に寄桃祝」として「わかやとの桃のはなさへ君かへん千世の林となりける哉」など知紀へ贈った歌も幾つか採録されている。

(19)

この宮中吹上御苑歌会において、宜野湾朝保は、「水石契久」(兼題)を「動きなき御代のこころの巖がねに掛けて絶えせぬ滝の白糸」と詠み、「紅葉如酔」(当座題)を「汲みかはすまどゐの外ののみちまでゑひのさかりとみゆるけふかな」と詠んだという。(『江戸時代人づくり風土記』47「沖繩」一九九三年三月、農文協)

去ル六日ニ遣ハされたる式通の書状一々承知致し候。只々御奉公大切ニ身躰ヲ養生して、心ヲ寛大ニもち候外無之候。○小藩ノ微身にし、皇后様の御側ニ給事すること誠に以テ面北之至り也。難有事ならずや。随分□□すべし。感状中ハ一々ニ承知すれども返事ハ略し申し候。(以下二行抹消)○是迄 皇后様の御小姓ハ御歴々のよし、左もあるべし。其御小姓ハ今ハなきかあるか、あらば何といふ人ニテ何位の御方の御子ナルヤ。又女孀ぐらいニテハ御次キの間までならではまるれず云々、左もあるべし。此度 皇後様の御側まで出るニ付テハ女孀ニハあらずして、御小姓ニもあらず、只御書籍掛りと唱える役か。又問ふ、女孀の上席八十何等なるヤ、夫レ等の事も追

て承り度候也。○今日ハ兼てしたためたる手紙ヲ遣ハさるべし。(以下省略)

十二月十日夜

平尾歌子とのへ

字引并単物添

同 録藏

* 図版に関しては、図1・図2はそれぞれ初版本から、図3・図4の新聞図版は、鈴木雄雅監修『日本初期新聞全集』全64巻・補巻2・別巻1(平成二年・ペリかん社)から転写したものである。

(実践女子大学図書館長・同短期大学教授)